

ボクを捨てないで

鶴 良夫

私の苦手は、長いものです。長いものに口があるものです。だから口縄と佐賀地方ではいいです。長いもので口が付いていても、『うなぎ』は苦手ではありません。好きです。うなぎの蒲焼が大好きなのです。私の苦手な物とどこが違うかというと、ウロコが付いているところが、大きな違いのようです。

私が東与賀に越してきた時は、まだまわりは立て込んでいませんでした。下飯盛八幡社の参道の目の前で、はるかに天山がよく見える場所で、自分でも大変気に入っていました。でもあつという間にまわりに、家が建て込み天山は見えなくなりました。

独り暮らしの私の仕事部屋を寂しがっていると思って、ちよくちよく訪ねてくれる招かない客があるのです。

ああ、とんでもないとところに家を建ててしまったと、後悔しましたが後の祭。

隣の中学生の涼ちゃんに畑に入ったから、追い出してくれと頼んだり、

『出た』といったきり、怯えきった私を気の毒に思った洋蘭会の会長が、長い奴の尻尾を捕まえて、

『どこにやりますか』

なんて平気な顔して聞くのです。

長いのが出てくると、男ですからキヤアキヤアはいいませんが、直視出来ずに後ずさりするのが私です。私の母親が、長いのが大嫌いで、テレビでたまたま放映されようものなら後ずさりをしていました。

聞くところに寄れば、妊娠している時に、出会って怖い目にあうと、生まれた赤ちゃんも苦手になると聞きます。本当かどうか知りませんが、親のいいところは受け継がないで情けないところを受け継いでいることを知り、とても残念です。

ある初夏の頃、朝からかなり陽射しのキツイ日でした。私は年中行事になっている蘭の植え替えを桐の木の木陰に入って、作業をしていました。蘭栽培は二年ごとに水苔を入れ替えないと大輪の花は咲きません。それに花付きも悪くなります。

なんだか変です。さつきから、高いところから見られているような視線を感じます。

何気なく見上げてみると、驚くじやありませんか。一番下の枝に体を巻きつけた一番嫌いな奴が、大きな口を開いて、舌をペロペロ出して私を見下ろしています。私は

もう声も出ません。硬直した体を後ずさりで、奴との距離を広げて、視線を逸らしたまま室内に逃げ込みました。

後日、前の増田さんとお婆ちゃんに話したら、

『あんた、そいは毒ば持つとつとよ。毒蛇しか木に登らんよ』

との有難いうんちくに、もう桐の木の側に行くことも出来ずに、お願いして桐の木は切倒してしまいました。

それで私は考えました。私の家のまわりをほつつき歩く、暇そうな猫に目を付けました。この暇そうな猫ちゃんを利用して、我が家を昼夜パトロールしてもらおうと、早速、餌を朝と夕方撒くことにしました。

あそこに行けば餌にありつけると、回覧板でもまわしたのか、あんまり見かけないような猫ちゃんまで集まりました。

用事がないノラ猫たちは、はやばやと集り、退屈しのぎに、ノラちゃん同士、猫パンチを出したり追いかけてつこをしたり、じつと座り込んでみたり、目を閉じて瞑想にふける猫ちゃんまで現れました。

そうなれば私の思う壺です。私は内心シメシメと思いニタリ顔をしながら眺めていました。

そんな状態の私の家のまわりには、私の苦手は姿を見せなくなりました。話はここで終わりません。まだ続きます。

常連の猫の中でキジ猫が妊娠していることに気が付きました。お腹はどんどん大きくなりました。このキジ猫は前の増田さんの床下をねぐらにしていることが分かりました。

『お前は、赤ちゃんの方まで食べなさい。まごまごしていると大きな黒助から取られるぞ』

私は、私の偏見と勝手なエコヒイキから、餌皿を地面から少しずつ高くして、とうとう餌皿を縁側にまで上げてしまいました。お腹ポンポコリンのキジ猫は、私のご好意が嬉しかったのか、ポンポコリンの猫だけが上がり込んで食べていました。

そんな日が何週間か過ぎました。ある日を境に、ポンポコリンは来なくなりました。

『あれれ、ひよっとしたらおめでたかな』

と思っていたら、三日目に骨皮筋衛門のような格好でポンポコリンが現れました。

お腹を地べたにくつつけて歩いたのが、お腹をペタンコに萎(しぼ)ませて、一声。『ニャアー』

『分かったよ。お腹がすいて死にそうか、はいはい。お待ちください』

そんな日から二、三週間過ぎた頃、面白い展開になりました。

あたりがすっかり暗くなった時でした。縁側に小さな可愛らしい子猫の顔が覗いています。一匹ではありません。二匹、三匹、四匹。どれも母親そっくりのキジ猫です。

四匹生まれたのだと思っていたら、翌日にはぐっと小さい真っ黒の子猫が加わりました。ちゃんと母親猫が引率して、お向かいから、道路を横切り、うちの低い煉瓦で囲われたヒイラギナンテンの生垣を乗り越え、草取りもゆき届いてないジャングルみたいな家の側溝を伝い、やっと、私がいつも居る南の縁側までたどり着くのです。

どこで仕込んだのか母親の危険信号が出ると、全員すばやく物陰に隠れます。穏やかな鳴き声を親猫が発すると危険信号解除なのでしょう。このこぞろぞろ部屋の中に入ってきます。

こうなればご褒美に牛乳でも飲ませないと悪いような気になってきました。私は一定の距離をおいて見ていました。決して抱き上げたりはしないことにしました。

私が作る離乳食は、母子ともに好評で、それが楽しみなのか、暗くなれば、キジ猫の子どもたちは、見る間に大きくなっていきました。ただ、一番小さい黒チビが、じやれあっているうちに背中に、引っかけ傷ができてしまいそれが原因でしょうか、姿が見えなくなりました。

体の大きい猫二匹は、冒険心を起こして、旅にでたようです。残る二匹は、余程居心地がよかったのか、残りの二匹で朝っぱらからやってきます。食事が済んだら、追いかけてこの運動をして、

特にテレビの裏側や本棚やピアノの上がお気に入り、遊び疲れたらそれぞれ決まった椅子の上でお昼寝。その頃には母親キジ猫は、新しいボーイフレンドに夢中で、子猫の面倒は見ません。猫の世界は、周期がとても早くて、年に二度も赤ちゃんを産んでいるようです。

さて、私のところに居ついてしまった二匹の子猫は、個性がはっきりしてきました。とても活発なスリムな方と、食べる意外はまるで興味がなく、寝てばかりいるメタボな方に分かれました。寝てばかりいる方はメスだと思っていたら、どちらもオスだと分かりました。まもなく、スリム君は夜の徘徊が始まりましたが、十一時になると締

め出されると分かったのか、門限はよく守ってくれましたが、ガールフレンドが出来るとそうはいきません。外泊が続きます。メタボ君はスリム君に刺激を受けるのではなく、食欲一筋で私の目の前の椅子に上がり込んで寝ています。そのうちにスリム君は、新婚旅行に出かけたのか、何日経っても帰ってきません。

スリム君に遅れること三週間、やっとメタボ君も夜の徘徊が始まりました。ある夜、凄いうなり声で喧嘩をしていたメタボ君は、背中にかなり大きな引っかけ傷を負うつて逃げ帰ってきました。

血は出ていませんでしたが、痛そうだったのでオロミン軟膏を塗ってバンドエードを貼っておきましたが、翌朝にはオロナミン軟膏に味があるか知りませんが、なめ散らかして、毛はむけ、肉まで見える状態に大きく広がっていました。

私はつめで引っかいた傷口が原因で死んでしまったチビの黒猫のことを思い出して、動物病院に連れて行くことにしました。

雨が降っていました。猫を入れるキャリーケースなんかはあるはずもありませんので、みかん箱に入れようと思いますが、入ってくれません。仕方がないので助手席に座らせて、ナフコの先の動物病院に連れて行きました。この猫は車に乗ったことは初めてです。着いた頃には後部座席の下で震えていました。

『さあ、病院に着いたよ。手当てしてもらおう』

と声をかけながら、両手で抱こうとすると、つめを立てて床にしがみ付いています。

メタボ君が必死になって訴えているようです。雨はまだ降っていました。

『嫌だ、病院は嫌だ』

といていると思っていました。あとで考えると、病院に来たとは知るわけがありません。メタボ君は、巧妙に体をよじって私の左手を振り切って、開いてるドアから、私の足もとを通り目にも留まらない速さで、病院の駐車場から隣の石垣を越えて見えなくなりました。

私は、逃げてしまった最後の目が、忘れられません。

『ぼくを捨てないで……』

といていたように思えてなりません。